

〔資料〕

学士課程教育の成果と看護実践現場の課題 —岐阜県立看護大学における卒業生への質問紙調査から—

星野 純子¹⁾ 小澤 和弘²⁾ 森 仁実³⁾ 石川 かおり³⁾
武田 順子⁴⁾ 小森 春佳²⁾ 北山 三津子³⁾

Outcome of Bachelor Degree Program and Issues of Nursing Practice: Questionnaire Survey of Graduates in Gifu College of Nursing

Junko Hoshino¹⁾, Kazuhiro Ozawa²⁾, Hitomi Mori³⁾, Kaori Ishikawa³⁾,
Junko Takeda⁴⁾, Haruka Komori²⁾ and Mitsuko Kitayama³⁾

I. はじめに

平成12年4月に岐阜県立看護大学看護学部看護学科(以下、本学とする)は開設され、平成15年度に最初の卒業生をだして以降、平成27年度までに1,053名の卒業生を輩出してきた。

本学は、看護学の高等教育機関としての人材育成を通して、岐阜県の看護の質の向上に寄与することを使命としており、この使命のもとに、ヒューマンケアの基本技術を身につけ、患者など看護の対象が遭遇する諸問題の解決に看護職として責任をもって取り組み、看護サービスの充実に貢献できる基礎的能力を有する人材を育成している。

本稿では、卒業後10年以上を迎える本学卒業生に実施した質問紙調査の結果から、学士課程4年間の教育の成果、および現在の勤務施設における看護実践現場の課題を確認し、今後の大学の取り組みを検討するための資料を得ることを目的とする。なお、卒業後10年以上を迎える卒業生を調査対象としたのは、実践現場の中堅看護職の立場となり、本学で受けた教育に対し実践現場の状況を踏まえた意見を述べる事が可能であると考えたからである。

II. 調査対象・方法

1. 調査対象

平成27年5月現在、本学を卒業して10年以上を迎え

る平成15年度(平成16年3月)卒業生82名、平成16年度(平成17年3月)卒業生81名、平成17年度(平成18年3月)卒業生89名の計252名を調査対象とした。

2. 調査方法

調査は無記名自記式の質問紙調査により実施した。平成27年5月に質問紙を送付し、回答期限を平成27年6月30日に設定した。質問紙の配付は、岐阜県立看護大学の看護研究センターが管理する卒業生に関するデータベースを用いて行い、対象者の現住所または帰省先住所が確認できた233名に対して「調査協力のお願い(説明書)」、質問紙、返信用封筒を郵送もしくは手渡しで配付し、質問紙の回収は郵送にて行った。

3. 調査項目

調査項目は、対象者の基本属性(卒業年度、看護職としての就業年数、看護職として勤務した施設数)、現在の勤務状況(勤務形態、職種、勤務施設、勤務施設の所在地、職位)、看護実践として実際に行っている(行った)内容、看護実践を行う際に大切にしていること、対象者が捉えている看護実践現場の課題、大学時代に身につけた能力および具体的な項目、大学での学びが現在の自分に与えた影響、現在の仕事や自身の生活において役立つ大学教育や大学生活の内容で構成した。

看護実践の現状については、文部科学省「大学におけ

1) 岐阜県立看護大学 成熟期看護学領域 Nursing of Adults, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Research and Collaboration Center, Gifu College of Nursing

3) 岐阜県立看護大学 地域基礎看護学領域 Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

4) 岐阜県立看護大学 育成期看護学領域 Nursing of Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

る看護系人材養成の在り方に関する検討会」にて提言された「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」（文部科学省，2011）に示される20項目の看護実践能力を参考にした。また、大学時代に身についた能力については、本学第1期中期計画における学士課程で付与すべき能力として示している5つの能力を用いた。大学時代に身についた具体的な項目については、本学が発行している大学案内や看護学領域別実習要綱、卒業研究Ⅰ・Ⅱ要綱、統合演習自己評価票を基に20項目を決定した。

なお、基本属性（看護職としての就業年数、看護職として勤務した施設数）、看護実践を行う際に大切にしていること、対象者が捉えている看護実践現場の課題については、選択式質問項目とし、その他については自由記載項目とした。

また、すべての調査項目に対して平成27年6月1日現在の状況で回答を依頼した。

4. 分析方法

分析方法は、選択式質問項目については単純集計を行った。また、自由記載の内容については要約して分類し、研究者間で分類の妥当性を確認した。

5. 倫理的配慮

本研究では、対象者へ質問紙を送付するため、本学の看護研究センターに対して卒業生データベースに保有されている卒業生の個人情報の開示を依頼した。看護研究センターにおいて使用目的や開示内容について審議され、調査対象となる卒業生の個人情報の開示の承認を受けた。

対象者に説明書と質問紙・返信用封筒を郵送もしくは手渡しで配付し、返信をもって同意されたものとみなした。無記名式であるため返信後はデータの削除ができないこと、結果は個人が特定されないように扱うことを明示した。また、得られた内容は本調査の目的以外には使用しないことを保障し、記載内容に地名・施設名などの固有名詞が含まれる場合は、特定されないよう記号化してからデータとした。

本調査は、岐阜県立看護大学研究倫理審査部会の承認を得て実施した（平成27年3月、承認番号：0123）。

Ⅲ. 調査結果

1. 回収状況と回答者の基本属性

配付数233名のうち、返送があったのは77名で回収率は33.0%であり、この77名分すべてを有効回答とした。

表1 基本属性

項目	人数	(%)
卒業年度		
平成15年度（卒業後12年目）	22	(28.6)
平成16年度（卒業後11年目）	29	(37.7)
平成17年度（卒業後10年目）	25	(32.5)
無回答	1	(1.3)
看護職としての就業年数（年）		
平均±標準偏差(最小-最大) ^a	8.8 ± 2.0	(3.3 - 15.2)
3年以上6年未満	5	(6.5)
6年以上9年未満	26	(33.8)
9年以上12年未満	41	(53.2)
12年以上	3	(3.9)
無回答	2	(2.6)
看護職として勤務した施設数		
平均±標準偏差(最小-最大) ^b	2.1 ± 1.2	(1 - 6)
1施設	26	(33.8)
2施設	24	(31.2)
3施設	17	(22.1)
4施設以上	7	(9.1)
無回答	3	(3.9)

注：n = 77。a：無回答2名を除外して75名を分析した。b：無回答3名を除外して74名を分析した。

回答者の基本属性を表1に示した。卒業年度は、「平成15年度（卒業後12年目）」が22名（28.6%）、「平成16年度（卒業後11年目）」が29名（37.7%）、「平成17年度（卒業後10年目）」が25名（32.5%）であり、すべての卒業年度の卒業生から回答があった。

回答者の看護職者としての平均就業年数は8.8年（最短3.3年、最長15.2年）であった。また、「9年以上12年未満」が41名（53.2%）と最も多く、次いで「6年以上9年未満」が26名（33.8%）であった。

卒業してから勤務した施設数では、平均2.1施設（最少1施設、最多6施設）であり、「1施設」が26名（33.8%）、「2施設」が24名（31.2%）、「3施設」が17名（22.1%）、「4施設以上」が7名（9.1%）であった。

2. 現在の勤務状況

回答者の現在の勤務状況を表2に示した。雇用形態では、「正規職員（フルタイム勤務）」が36名（46.8%）、正規職員（産休・育児・介護など休業中）が15名（19.5%）、正規職員（短時間勤務）が2名（2.6%）、「非正規職員」が9名（11.7%）、「その他」が1名（1.3%）、「勤めていない」が14名（18.2%）であり、「勤めていない」を除く現在勤務している者（以下、在職者とする）は63名（81.8%）であっ

た。また、「正規職員」は休業中の者も含めて全体で53名(68.8%)であった。

在職者の主たる職種は、「看護師」が30名(47.6%)、「保健師」が15名(23.8%)、助産師が7名(11.1%)、養護教諭が2名(3.2%)であった。

在職者の主たる勤務施設は、「病院(100-499床)」が15名(23.8%)と最も多く、次いで「病院(500床以上)」

が13名(20.6%)、「市町村保健・福祉部門」が10名(15.9%)であり、診療所と病院に勤務している者は37名(58.7%)であった。また、現在の勤務施設の所在地は、「岐阜県」が39名(61.9%)と最も多く、次いで「愛知県」が13名(20.6%)であった。

現在の勤務施設での職位は、「スタッフ」が50名(79.4%)と最も多く、次いで「中間管理職」が8名(12.7%)となっており、「管理職」に1名(1.6%)の回答があった。

表2 在職者の現在の勤務状況

項目	人数	(%)
現在の雇用形態		
正規職員(フルタイム勤務)	36	(46.8)
正規職員(産休・育児・介護など休業中)	15	(19.5)
正規職員(短時間勤務)	2	(2.6)
非正規職員	9	(11.7)
その他	1	(1.3)
勤めていない	14	(18.2)
現在の主たる職種 ^a		
看護師	30	(47.6)
保健師	15	(23.8)
助産師	7	(11.1)
養護教諭	2	(3.2)
大学教員	6	(9.5)
その他	3	(4.8)
現在の主たる勤務施設 ^a		
診療所	7	(11.1)
病院(20-99床)	2	(3.2)
病院(100-499床)	15	(23.8)
病院(500床以上)	13	(20.6)
高齢者ケア施設	2	(3.2)
市町村保健・福祉部門	10	(15.9)
企業の健康管理部門	1	(1.6)
小中高等学校・特別支援学校	3	(4.8)
教育研究機関	6	(9.5)
その他	3	(4.8)
無回答	1	(1.6)
現在の勤務施設の所在地 ^a		
岐阜県	39	(61.9)
愛知県	13	(20.6)
その他	11	(17.5)
現在の職位 ^a		
スタッフ	50	(79.4)
中間管理職(看護師長・主任等)	8	(12.7)
管理職(院長・看護部長等)	1	(1.6)
その他	3	(4.8)
無回答	1	(1.6)

注：n = 77。a：現在の雇用形態の設定に「正規職員」「非正規職員」「その他」と回答した63名を分析した。

3. 看護実践の状況、看護実践において大切にしていること、看護実践現場の課題

現在、看護実践をどの程度行っているか、またはこれまで行っていたか項目別に尋ねた結果を表3に示した。「非常に行っている」または「まあ行っている」と回答した者が8割以上であった項目は、「看護の対象となる人々の尊厳と権利を擁護する」「実施する看護について説明し同意を得る」「看護の対象となる人々と援助的関係を形成する」「根拠に基づいた看護を提供する」「看護援助技術を適切に実施する」の5項目であった。一方、「行っていない」が2割以上であった項目は、「地域ケア体制づくりと看護機能の充実を図る」「終末期にある人々を援助する」「社会の動向を踏まえて看護を創造する」「保健医療福祉における看護活動と看護ケアの質を改善する」の4項目であった。

看護を実践する際に大切にしていることには61名の記載があり、そのうち59名の記載から123件の内容を取り出すことができた。それらを意味内容ごとに分類したところ、【コミュニケーションを大切に、信頼関係構築に努める】【倫理的視点を持ち、対象者の尊厳を擁護する】【個人・家族・集団を看護の対象とし、広い視野で理解する】【対象者の背景を踏まえ、個別性のある看護を行う】【対象者に寄り添い、ニーズに合った看護を行う】【対象者を生活者としてとらえ、退院後を見通した看護を行う】【最新の知識や根拠に基づき、安全・安心な看護を行う】【対象者による主体的な問題解決を支援する】【多職種間・看護職種間で協働・連携する】【職場の雰囲気や人間関係を円滑にする】の10項目に分類された(表4)。

また、看護実践現場の課題には58名の記載があり、そのうち46名の記載から60件の内容を取り出すことができた。それらを意味内容ごとに分類したところ、【人手不足・業務多忙のため看護の質の維持・向上が困難になっている】【看護実践自体に難しさがある】【看護を取りまく環境から生じる

表3 看護実践として実際に行っている（行った）内容

項目	非常に 行っている	まあ 行っている	どちらとも いえない	行って いない	無回答・ 誤回答
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
看護の対象となる人々の尊厳と権利を擁護する	38 (49.4)	37 (48.1)	0 (0.0)	1 (1.3)	1 (1.3)
実施する看護について説明し同意を得る	38 (49.4)	31 (40.3)	4 (5.2)	3 (3.9)	1 (1.3)
看護の対象となる人々と援助的関係を形成する	32 (41.6)	38 (49.4)	5 (6.5)	1 (1.3)	1 (1.3)
根拠に基づいた看護を提供する	33 (42.9)	35 (45.5)	6 (7.8)	2 (2.6)	1 (1.3)
計画的に看護を実践する	24 (31.2)	33 (42.9)	16 (20.8)	3 (3.9)	1 (1.3)
健康レベルを成長発達に応じて査定 (Assessment) する	22 (28.6)	34 (44.2)	16 (20.8)	4 (5.2)	1 (1.3)
個人と家族の生活を査定 (Assessment) する	26 (33.8)	34 (44.2)	12 (15.6)	4 (5.2)	1 (1.3)
地域の特性と健康課題を査定 (Assessment) する	16 (20.8)	22 (28.6)	27 (35.1)	11 (14.3)	1 (1.3)
看護援助技術を適切に実施する	42 (54.5)	24 (31.2)	6 (7.8)	4 (5.2)	1 (1.3)
健康の保持増進と疾病を予防する	25 (32.5)	31 (40.3)	16 (20.8)	4 (5.2)	1 (1.3)
急激な健康破綻と回復過程にある人々を援助する	30 (39.0)	24 (31.2)	11 (14.3)	11 (14.3)	1 (1.3)
慢性疾患及び慢性的な健康課題を有する人々を援助する	25 (32.5)	30 (39.0)	10 (13.0)	11 (14.3)	1 (1.3)
終末期にある人々を援助する	20 (26.0)	20 (26.0)	10 (13.0)	26 (33.8)	1 (1.3)
保健医療福祉における看護活動と看護ケアの質を改善する	6 (7.8)	24 (31.2)	27 (35.1)	19 (24.7)	1 (1.3)
地域ケア体制づくりと看護機能の充実を図る	5 (6.5)	22 (28.6)	22 (28.6)	27 (35.1)	1 (1.3)
安全なケア環境を提供する	23 (29.9)	32 (41.6)	16 (20.8)	4 (5.2)	2 (2.6)
保健医療福祉における協働と連携をする	12 (15.6)	37 (48.1)	17 (22.1)	10 (13.0)	1 (1.3)
社会の動向を踏まえて看護を創造する	7 (9.1)	21 (27.3)	27 (35.1)	21 (27.3)	1 (1.3)
生涯にわたり継続して専門的能力を向上する	17 (22.1)	28 (36.4)	24 (31.2)	7 (9.1)	1 (1.3)
看護専門職としての価値と専門性の理解を発展させる	15 (19.5)	25 (32.5)	26 (33.8)	10 (13.0)	1 (1.3)

注：n = 77.

表4 看護実践において大切にしていること

分類	記述内容例
コミュニケーションを大切にし、信頼関係構築に努める	患者や家族とのコミュニケーションを大切にし、信頼関係を築くことを主としている。業務をこなすのみでなく、患者と接する時間をつくるようにする。
倫理的視点を持ち、対象者の尊厳を擁護する	患者の一人の人間としての尊厳を大切にし、退院後にもつながるような看護を行う。倫理的視点を大切に支援する。
個人・家族・集団を看護の対象とし、広い視野で理解する	対象者をその場その場で判断するのではなく、その背景にあるもの等あらゆる面から総合的に判断・理解し、そのらしさを大切にいく。
対象者の背景を踏まえ、個別性のある看護を行う	患者・家族が大切にしてきたことを大事に想う・尊重するということを一番に考えている。ライフスタイル、家族関係など個人の背景をふまえて看護を計画・実践する。
対象者に寄り添い、ニーズに合った看護を行う	患者の思いに寄り添った看護を実践する。患者個々のニーズに合った看護を創造、展開する。
対象者を生活者としてとらえ、退院後を見通した看護を行う	患者を生活者として捉えて支援する。急性期から退院後の生活を視野に入れて看護を行うよう努める。
最新の知識や根拠に基づき、安全・安心な看護を行う	安全で確実に看護を実践する。根拠に基づいた看護を提供する。患者さんへの検査説明などを丁寧に行うようにする。
対象者による主体的な問題解決を支援する	患者が地域の中で生活する上で生じてくる問題に対処できる力をもてるように、サポートしていく。
多職種間・看護職間で協働・連携する	医師や理学療法士、ソーシャルワーカーなど、他職種とも連携をとりながら進めていくこと。チームメンバーで情報を共有し、看護計画や実践において統一されたケアが提供できるようにする。
職場の雰囲気や人間関係を円滑にする	後輩看護師の育成や楽しく仕事ができる雰囲気づくり。スタッフ間の円滑な人間関係。

難しさがある】【看護チームの機能を高めていくことが難しい】
 【現場の実践に対して組織的な理解が得られない】【現任教
 育が上手く機能していない】【他部署や地域との連携が不
 十分である】【対象者と関わる時間が確保できない】【人手

不足である】の9項目に分類された(表5)。

4. 大学時代に身についた能力、大学での学びが自身
 に与えた影響・役立ったこと

本学が目指す学士課程において付与すべき能力が、大

表5 在職者が捉えている現在の勤務施設における看護実践現場の課題

分類	記述内容例
人手不足・業務多忙のため看護の質の維持・向上が困難になっている	人員不足により効率化を重視しすぎて、看護の質の低下を招いている。忙しさから、看護ケアが先立って、看護計画を事後に立案している現状がある。看護計画の修正、また個別性のある計画まで至らない。
看護実践自体に難しさがある	外来通院患者が病気を悪化させることなく生活するための看護介入方法。地域住民を巻き込んだ地域づくりをどうしていくか。高血圧、糖尿病、高脂血症等、自覚症状が早期では少ない疾病に関して、対象者に行動変容してもらうためのアプローチ方法に困難を感じる。退院調整に苦労することが多い。
看護を取りまく環境から生じる難しさがある	高齢化に伴う生活習慣病患者数増加の恐れ。高校では保健指導の場（特に集団指導）が少ない。
看護チームの機能を高めていくことが難しい	チームで協働して支援を展開すること。カンファレンスは増えたが、義務的に行っている状況があり、個々のケースに応じた話し合いがなされていない。看護職の大半が、自分で行いたい看護観が全くないため、やりがいにもつながらず、申し送り等も不十分である。
現場の実践に対して組織的な理解が得られない	管理職の考え方が第一であり、現場で考えた「これが最も一番よい」と思ったことが実践できない。または、急に方向転換が示され、現場が混乱する。保育・療育施設における看護師の役割・意義を管理職に理解してもらうのが難しい。
現任教育が上手く機能していない	看護師による看護の質の差がある。業務が多忙すぎて、新人看護師・後輩看護師の育成OJTがうまく機能していない。
他部署や地域との連携が不十分である	他部署との連携に不十分さがある。
対象者と関わる時間が確保できない	業務が非常に煩雑で、患者一人とじっくり関わる時間がもてない。多忙すぎて、患者一人一人の精神的ケアの時間の確保が困難である。人手不足で、ひとりひとりの患者のケアに使える時間が十分に確保できない。
人手不足である	看護師の人数不足。人手不足により、時間に追われてスタッフに余裕がない。

表6 大学時代に身についた能力

項目	十分身についた	まあ身についた	どちらともいえない	身につけていない	無回答
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
生活者としての人間に対する深い理解と統合的な判断力を持ち、人々のヘルスケアニーズに対応できる能力	10 (13.0)	34 (44.2)	26 (33.8)	4 (5.2)	3 (3.9)
保健・医療・福祉領域の専門職や関係者とケアチームを組んで協働活動ができる能力	8 (10.4)	30 (39.0)	27 (35.1)	9 (11.7)	3 (3.9)
多様な課題の問題解決に取り組むために自ら専門機能を拡大していく能力	8 (10.4)	34 (44.2)	26 (33.8)	6 (7.8)	3 (3.9)
看護実践を重ねることを通して看護学研究への関心を深め看護実践の改革に貢献できる基礎的能力	5 (6.5)	25 (32.5)	38 (49.4)	6 (7.8)	3 (3.9)
主体的な自己を確立する能力と幅広い視野、複眼的な思考・判断力	12 (15.6)	32 (41.6)	26 (33.8)	4 (5.2)	3 (3.9)

注：n = 77.

学時代にどの程度身についたか項目別に尋ねた結果を表6に示した。「十分身についた」または「まあ身についた」と回答した割合が高い方から、「生活者としての人間に対する深い理解と統合的な判断力を持ち、人々のヘルスケアニーズに対応できる能力」と「主体的な自己を確立する能力と幅広い視野、複眼的な思考・判断力」がそれぞれ44名(57.1%)、「多様な課題の問題解決に取り組むために自ら専門機能を拡大していく能力」が42名(54.5%)、「保健・医療・福祉領域の専門職や関係者とケアチームを組んで協働活動ができる能力」が38名(49.4%)であり、「看護実践を重ねることを通して看護学研究への関心を深め看護実践の改革に貢献できる基礎的能力」が30名(39.0%)と最も

低かった。

さらに、大学時代に身についた能力について、具体的な内容を20項目挙げて尋ねた結果を表7に示した。「十分身についた」または「まあ身についた」と回答した者が7割以上であった項目は、「看護に対する興味や問題意識を常にもつ」が68名(88.3%)、「対象者へのよりよい援助を創造する」が61名(79.2%)、「看護実践の中で遭遇する諸問題に責任を持って解決する」と「倫理的視点を踏まえて看護を計画し、実践する」がそれぞれ59名(76.6%)であった。

一方、「十分身についた」または「まあ身についた」と回答した者が5割未満であった項目は、「よりよい看護を追

表7 大学時代に身についた項目

項目	十分 身についた	まあ 身についた	どちらとも いえない	身について いない	無回答
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
看護に対する興味や問題意識を常にもつ	15 (19.5)	53 (68.8)	6 (7.8)	0 (0.0)	3 (3.9)
看護実践の中で遭遇する諸問題に責任を持って解決する	13 (16.9)	46 (59.7)	12 (15.6)	3 (3.9)	3 (3.9)
倫理的視点を踏まえて看護を計画し、実践する	16 (20.8)	43 (55.8)	13 (16.9)	2 (2.6)	3 (3.9)
看護過程を展開する	13 (16.9)	36 (46.8)	23 (29.9)	2 (2.6)	3 (3.9)
適切に看護技術を用いる	4 (5.2)	26 (33.8)	36 (46.8)	8 (10.4)	3 (3.9)
対象者へのよりよい援助を創造する	13 (16.9)	48 (62.3)	10 (13.0)	3 (3.9)	3 (3.9)
自立・自律して看護実践を行う	13 (16.9)	34 (44.2)	21 (27.3)	6 (7.8)	3 (3.9)
保健・医療・福祉等の関係者と協働し、主体的に活動する	8 (10.4)	31 (40.3)	28 (36.4)	6 (7.8)	4 (5.2)
看護実践を振り返り、自らの言葉で説明する	16 (20.8)	37 (48.1)	17 (22.1)	4 (5.2)	3 (3.9)
主体的に課題をみつける	13 (16.9)	37 (48.1)	19 (24.7)	5 (6.5)	3 (3.9)
よりよい看護を追求するために研究をする	8 (10.4)	27 (35.1)	30 (39.0)	9 (11.7)	3 (3.9)
看護専門職として自分自身を発展させる	12 (15.6)	40 (51.9)	17 (22.1)	5 (6.5)	3 (3.9)
人・生活・地域に焦点をあてた看護	17 (22.1)	36 (46.8)	16 (20.8)	5 (6.5)	3 (3.9)
国民の健康と生活を守る社会のしくみについての知識	4 (5.2)	36 (46.8)	30 (39.0)	4 (5.2)	3 (3.9)
人間の生活を理解するための家族・倫理・人間の発達についての知識	4 (5.2)	47 (61.0)	22 (28.6)	1 (1.3)	3 (3.9)
個人や集団を対象とした健康の保持増進、病気の予防についての知識	8 (10.4)	40 (51.9)	25 (32.5)	1 (1.3)	3 (3.9)
人間の身体のしくみや治療方法についての知識	2 (2.6)	32 (41.6)	34 (44.2)	6 (7.8)	3 (3.9)
一人の個人として豊かな人生を創るために必要な力	10 (13.0)	29 (37.7)	32 (41.6)	3 (3.9)	3 (3.9)
看護専門職として自己実現をはかるときに必要な問題解決能力	7 (9.1)	34 (44.2)	27 (35.1)	6 (7.8)	3 (3.9)
生涯にわたる自己の健康管理、国際化、情報化に対応するための力	4 (5.2)	21 (27.3)	37 (48.1)	12 (15.6)	3 (3.9)

注：n = 77.

求するために研究をする」が35名(45.5%)、「人間の身体のしくみや治療方法についての知識」が34名(44.2%)、「適切に看護技術を用いる」が30名(39.0%)、「生涯にわたる自己の健康管理、国際化、情報化に対応するための力」が25名(32.5%)であった。さらに、「身についていない」と回答した者が1割以上であった項目は、「生涯にわたる自己の健康管理、国際化、情報化に対応するための力」が12名(15.6%)、「よりよい看護を追求するために研究をする」が9名(11.7%)、「適切に看護技術を用いる」が8名(10.4%)であった。

また、大学での学びが現在の自分にどのように影響しているかには44名の記載があり、そのうち41名の記載から54件の内容を取り出すことができた。それらを意味内容ごとに分類したところ、【看護専門職としての基礎として活かされている】【看護観の構築に影響している】【他者に分かりやすく伝え意見交換する方法と能力が身に付いた】【多角的に事象を捉える力が身に付いた】【対象者を生活者として捉え対象者に合わせて支援する】【先を見通した視点を持つ

て支援する】【看護に対する問題意識を持ち、課題を探求する姿勢と問題解決能力が身に付いた】【看護研究に関心を持ち研究を実施することができた】【自分の責任で主体的に行動する力が付いた】【看護専門職としてのキャリアマネジメントに影響している】【地域のなかで多機関・多職種と連携して支援する】【卒研の体験が自分の自信や支えとなっている】【大学生活での学びは役に立たなかった】の13項目に分類された(表8)。

大学教育や大学生活が現在の仕事や自分自身にどの程度役立ったか19項目で尋ねた結果を表9に示した。「非常に役に立った」または「まあ役に立った」と回答した者が7割以上であった項目は、「看護学の専門科目全般」「看護学の実習」「グループワーク」など11項目であり、特に8割以上であった項目は、「看護職としての人間性についての学び」「友人との交流」がそれぞれ67名(87.0%)、「看護に対する姿勢についての学び」「学内の施設環境」がそれぞれ65名(84.4%)、「問題解決への取り組みについての学び」が64名(83.1%)の5項目であった。一方、5割

表8 大学での学びが現在の自分に与えた影響

分類	記述内容例
看護専門職としての基礎として活かされている	基礎教育という名の通り、自分が看護を考えていく際のベースになっているのは、大学4年間で学んだことの影響が大きいと感じている。
看護観の構築に影響している	講義や演習・実習の中で、先生や指導者、対象の方々からその時々々に教えていただくすべてのことが、今の自分自身の人間性を築き、看護観や看護の楽しさ・すばらしさを知ることができた。
他者に分かりやすく伝え意見交換する方法と能力が身についた	数多くのグループワークやレポート提出を通して、自分の言葉でより分かりやすく相手に伝えることの重要性和そのノウハウを学んだ。
多角的に事象を捉える力が身についた	看護の知識だけでなく、教養科目も学ぶことで、広い視野と多角的に物事を捉える実践力をつけられた。
対象者を生活者として捉え対象者に合わせて支援する	対象を生活者として捉える視点が養われたことで、人生としての線の点の部分に自分が関わっている、という意識で入院中の支援を行えた。
先を見通した視点を持って支援する	入院中だけでなく、退院後につながるケアという視点を持てた。
看護に対する問題意識を持ち、課題を探求する姿勢と問題解決能力が身についた	課題を見つけ、解決するための能力が付き、自分で考えて動くようになった。常に問題意識をもつことや、看護とは、ということ考えた生活だったので、その姿勢はベースになっている。
看護研究に関心を持ち研究を実施することができた	卒業研究をすることで看護研究とはどういうものかが学べ、看護学会への興味も湧いた。参加することで看護の奥深さをいつも感じる。
自分の責任で主体的に行動する力がついた	看護専門職として、生涯学び続けるのが当然という基本姿勢が身についた。
看護専門職としてのキャリアマネジメントに影響している	看護師としてどのようにキャリアを積んでいくか、先を見ながら考えるようになった。
地域のなかで多機関・多職種と連携して支援する	地域に根ざした看護の必要性を大学では学び、今在宅にフィールドをうつし、保健医療福祉サービスの連携の大切さを感じている。
卒研の体験が自分の自信や支えとなっている	大変だった卒研が自信だったり、支えとなっている。多忙な日々の中でも、卒研の時の患者との関わりや学びを思い出して、初心に返ることが少しでもできた。
大学生活での学びは役に立たなかった	大学4年間で学んだ看護の知識は、働いている時はほとんど役に立ったという実感が無い。

表9 現在の仕事もしくは自分自身に役立った大学教育、大学生活

項目	非常に役に立った	まあ役に立った	どちらともいえない	役に立っていない	非該当 ^a	無回答・誤回答
	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
看護学の専門科目全般	16 (20.8)	38 (49.4)	19 (24.7)	2 (2.6)	-	2 (2.6)
看護学の演習	16 (20.8)	32 (41.6)	24 (31.2)	3 (3.9)	-	2 (2.6)
看護学の実習	26 (33.8)	35 (45.5)	13 (16.9)	2 (2.6)	-	1 (1.3)
卒業研究	25 (32.5)	33 (42.9)	14 (18.2)	3 (3.9)	-	2 (2.6)
教職科目 ^b	5 (25.0)	8 (40.0)	6 (30.0)	0 (0.0)	57	1 (5.0)
専門関連科目 (福祉学、保健学、人体・治療学、生活学)	11 (14.3)	39 (50.6)	22 (28.6)	4 (5.2)	-	1 (1.3)
教養科目全般	6 (7.8)	32 (41.6)	33 (42.9)	5 (6.5)	-	1 (1.3)
英語、世界の文化と言葉 (中国語、韓国語、スペイン語)	2 (2.6)	17 (22.1)	35 (45.5)	22 (28.6)	-	1 (1.3)
他者に対する教育の方法 (実習・演習・講義で受けた指導方法等)	13 (16.9)	33 (42.9)	25 (32.5)	5 (6.5)	-	1 (1.3)
グループワーク	30 (39.0)	30 (39.0)	15 (19.5)	1 (1.3)	-	1 (1.3)
看護に対する姿勢についての学び	29 (37.7)	36 (46.8)	9 (11.7)	2 (2.6)	-	1 (1.3)
看護職としての人間性についての学び	26 (33.8)	41 (53.2)	7 (9.1)	2 (2.6)	-	1 (1.3)
問題解決への取り組みについての学び	24 (31.2)	40 (51.9)	10 (13.0)	2 (2.6)	-	1 (1.3)
学内の施設環境 (図書館、実習室、マルチメディア教室等)	35 (45.5)	30 (39.0)	10 (13.0)	1 (1.3)	-	1 (1.3)
友人との交流	45 (58.4)	22 (28.6)	7 (9.1)	1 (1.3)	-	2 (2.6)
教員との交流	29 (37.7)	27 (35.1)	18 (23.4)	2 (2.6)	-	1 (1.3)
サークル活動 ^b	10 (30.3)	9 (27.3)	11 (33.3)	2 (6.1)	44	1 (3.0)
インターンシップ ^b	0 (0.0)	2 (40.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	72	1 (20.0)
ボランティア活動 ^b	7 (26.9)	13 (50.0)	5 (19.2)	0 (0.0)	51	1 (3.8)

注：n = 77。a：「教職科目」を履修しなかった、「サークル活動」「インターンシップ」「ボランティア活動」を行わなかったと回答したものを非該当とした。b：割合は「非該当」を除いて算出した。

に満たない項目は、「教養科目全般」が38名(49.4%)、「インターンシップ」が2名(40%)、「英語、世界の文化と言葉」が19名(24.7%)であった。

IV. 考察

本学を卒業して10年以上を迎える77名の調査協力者は、看護職として9年以上就業した者が44名(57.1%)と半数以上であり、勤務した平均施設数は2.1施設であった。また、現在の勤務施設が診療所・病院である者は37名(58.7%)と最も多く、次に市町村保健・福祉部門である者が10名(15.9%)と多かった。勤務施設の所在地が岐阜県である者は39名(61.9%)であり、最も多かった。本学は、県内の看護の質を向上するための看護学の教育・研究活動機関として設置されたが、今回、卒業者の多くが県内で長期間看護職として勤務している現状が明らかとなった。在職者の現在の職位について、中間管理職も含む管理職である者は9名(14.3%)みられ、今後の活躍が期待できる。

本学は教育目標を達成するために5つの能力の育成を目指している。そのうち「生活者としての人間に対する深い理解と統合的な判断力を持ち、人々のヘルスケアニーズに対応できる能力」と「主体的な自己を確立する能力と幅広い視野、複眼的な思考・判断力」について、大学時代に「十分身についた」もしくは「まあ身についた」と回答した者は各44名(57.1%)と最も多かった。これらの能力が身についているためか、看護実践をする際に大切にしていることとして【対象者を生活者としてとらえ、退院後を見通した看護を行う】【対象者に寄り添い、ニーズに合った看護を行う】【個人・家族・集団を看護の対象とし、広い視野で理解する】などとそれらに近い内容が記載されており、大学時代に身についた能力を看護実践現場でいかしている可能性が考えられる。

一方、「看護実践を重ねることを通して看護学研究への関心を深め看護実践の改革に貢献できる基礎的能力」について、大学時代に「十分身についた」もしくは「まあ身についた」と回答した者は30名(39.0%)であった。本学は5つの能力の育成を目指しているが、卒業時の到達目標として身につけるところまで設定していないため、それらの能力を理解しているものの、身についたと感じるまでには至らなかった者が少なくないと考えられる。本学は、平成28年度に学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)を策定し、

本調査で用いた能力とは表現が若干異なるが、卒業時に身につけておくべき5つの能力を明確にしたため、今後卒業する者はそれらの能力が身についたかどうかの自己評価が行いやすくなると思われる。

また、看護実践として実際に行っている(行った)内容のうち「保健医療福祉における看護活動と看護ケアの質を改善する」「地域ケア体制づくりと看護機能の充実を図る」といった看護実践の改革が求められる内容について、「非常に行っている」または「まあ行っている」と回答した者は約30名程度と半数に満たず、卒業して10年以上を迎える者でもこれらの実践は難しいことがうかがえる。しかし、現在の看護実践現場の課題として、【人手不足・業務多忙のため看護の質の維持・向上が困難になっている】【看護実践自体に難しさがある】【看護チームの機能を高めていくことが難しい】などと記載されており、卒業者は看護実践の改革に貢献できる能力を看護職として身につける必要性や意義について十分に理解している可能性が考えられる。卒業者のこのような理解は、大学での「看護実践を重ねることを通して看護学研究への関心を深め看護実践の改革に貢献できる基礎的能力」についての学びがあつてこそことであろう。今後も、学士課程教育で看護実践に貢献できる基礎的能力をどのように培うのか、さらなる教育方法の改善・開発が求められる。また、このような課題を抱える卒業者に対し、大学としてどのような支援ができるのか検討が必要である。

大学での学びが現在の自分に与えた影響として、【看護に対する問題意識を持ち、課題を探究する姿勢と問題解決能力が身についた】【自分の責任で主体的に行動する力がついた】【多角的に事象を捉える力が身についた】といった本学の教育目標に近い内容が記載されていた。また、現在の仕事もしくは自分自身に役立った大学教育や大学生活として、看護学の専門科目や専門関連科目、看護に対する姿勢についての学び、問題解決への取り組みについての学び等の全般に「非常に役立った」または「まあ役立った」と半数以上の者が回答していた。これらのことから、本学の学士課程教育の成果として、卒業者は大学で培った教育目標に沿った力を、看護実践現場でいかしていると考えられる。

今後は、属性による詳細な分析や、他の調査との比較を踏まえて学士課程4年間の教育の成果とこれからの大学の取組みについて検討する必要がある。

謝辞

本調査にご協力いただいた本学卒業者の皆様に深く感謝申し上げます。

本研究は、本学のこれまでの取組みの成果および今後に向けた課題を把握するために計画された本学事業の一部である。

文献

文部科学省. (2011). 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告. 2016-12-08. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm

(受稿日 平成 28 年 8 月 29 日)

(採用日 平成 29 年 1 月 11 日)